新潟大学国際センター紀要　第12号　13－22，2016年　Journal of the International Exchange Support Center
2016，Vol.12：13－22，Niigata University

「です」は「だ」の丁寧体？

Is “*desu*” a polite form of “*da*” ?

池田　英喜

A Little argument of the sentence ending forms in Japanese which are “*desu*” and “*da*”. People believe that “*desu*” is a polite form of “*da*” and they are taught in that way in Japanese language classes. In this article, however, I tried to prove that they both belong to a totally different speech mode ; “*da*” to Monologue mode and “*desu*” to Dialogue mode, and that the previous explanation about these 2 sentence ending forms is dangerous.

キーワード：独話系発話、対話系発話、一語文、断定

はじめに

外は雪です。
教室の中は静かです。

　日本語教育の現場では「～です」で終わる文は丁寧な文だと教える。多分丁寧な文なのだろうと思う。しかし、これらを丁寧でない文に変換しようと考えた際には、以下のような文となって出現するのが一般的である。

外は雪だ。
教室の中は静かだ。

果たして本当にそうか、というのが本小考の出発点である。

外は雪だ。
外は雪。
教室の中は静かだ。
教室の中は静か。

前出の「だ」で終わる文から「だ」を取り除いても、話し言葉であれば、それほど違和感は感じない。また、これらの文は、名詞文・ナ形容詞文[注1]であり、イ形容詞文の場合、そもそも「だ」で終わる形は存在しない。以下はその例である。

冬の新潟は暗いです。
冬の新潟は暗い。
＊冬の新潟は暗いだ。

「だ」の本務

「です」を「だ」の丁寧体だとするならば、名詞文・ナ形容詞文の場合にだけ出現し、イ形容詞文の場合には出現しないという点に、いびつさを感じる。

では、そもそも、「だ」とそれに類似する形式はどのように整理されているのだろうか。『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―国立国語研究所』（1951）から、「だ」「です」の記述だけを拾ってみる。

第二部　助動詞
９．　だ
①断定・指定の意味を表す。判断辞の代表的なもの。《体言、準体助詞、その他体言対当のものにつく。ただし、未然形・仮定形は、動詞、形容詞、助動詞の「せる」「させる」「しめる」「れる」「られる」「た」「たい」「ない」「ぬ」「らしい」の終止形につく。》
１２．　です
①断定の意味に話手の聞手に対する敬意・丁寧さの加わった形。すなわち、「だ」の丁寧体。

「です」が「だ」の丁寧体という扱いは一般の理解と同じだが、ここで注意すべきは、「です」は「だ」に「話手の聞手に対する敬意・丁寧さの加わった形」としている点である。ここでの説明によれば、聞き手を想定しなければ、「だ」は丁寧体というものを持たないということを、図らずも示していると言えないだろうか。

たとえば次のような状況を考えてみる。外に雪が降り始めたことに気づいて、以下のような発話をしたとしよう。

「あっ、雪。」

これを文字として記録した場合、「！」とともに書かれることが多い。

「あっ、雪!。」

雪の後に出現するエクスクラメーションマーク「！」は、まさに驚きといった一瞬の気持ちの変化を示そうとしているのだと思うが、そもそも日本語の記号ではない。こういう記号を用いずに記すと、「あっ、雪だ。」と、「だ」のついた形になると考えてはどうだろう。何かに気づいた、あるいは何かを感じた瞬間にそのものを示す、いわゆるモノの名前（名詞）を叫ぶというのは、非常に個人的、独話的行為であり、特に聞き手である他者を必要とはしないし、そもそも聞き手を意識して発話するものではない。そしてこの一語の発話には、名詞がよく用いられるが、それはまさに話し手がその名詞で呼ばれるモノやコトを認識したことを示す発話なのであり、そのままではただ単にモノ・コトを示す名前でしかない。この話し手の発話を、文という形へと昇華させる働きを担う存在が、この「だ」の機能と考えられるのではないだろうか。だからこそ、この発話を記録するとき、すなわち書き言葉にするとき出現するのが「だ」であり、これこそが「だ」の本務的機能だとは言えないだろうか。

一方、イ形容詞はそれ自体が、ある状況に対する話し手の判断意識の反映であり、つまり、それを用いての発話は、「だ」のような補助的な装置なしでも文として成立する。よって、「だ」を後接させることができない。

丁寧体

丁寧さを表わす文末形式には、「です」と「ます」があげられる。言うまでもなく、「ます」は動詞文を丁寧な形にするのに用いられる。

走る。（普通体：走る＋φ[注2]）
走ります。（丁寧体：走る＋ます）

同様にイ形容詞の場合は、「です」をつけて丁寧な形を作る。

寒い。（普通体：寒い＋φ）
寒いです。（丁寧体：寒い＋です）

名詞・ナ形容詞の場合も同様に、「です」をつけて丁寧な形を作る。

虹。（普通体：虹＋φ）
虹です。（丁寧体：虹＋です）
静か。（普通体：静か＋φ）
静かです。（丁寧体：静か＋です）

一方で、丁寧でない形を拾ってみると、

走る。
寒い。
虹。
静か。

となる。そのまま読点をつけて書き言葉として文末に使えるのは、

走る。
寒い。

の２つだけで、名詞・ナ形容詞の２つは、

虹だ。
静かだ。

と「だ」を後ろに付けて「書か」ないと、どうも落ち着きがない。ここで考えなければならないのは、「書く」という点である。話し言葉の場合、たとえば雨上がりに空に掛かる虹を見つけて思わず「虹。」と叫ぶこともあるだろう。先にも述べたが、こうした発話は、聞き手である他者の存在を意識せずに思わず口から出た言葉であることが多い。これを文字化して記述するときに、もし「虹」とだけ書いたのではただ単に名詞を１つ書き記したことにしかならない。しかし「だ」を書き添えることで、発話者が自分の言葉として発したものだと認定し、文として表現できることになる。同様の記述が三枝（2001）にあるので、以下に引用する。

> 「XはYだ。」という名詞述語文において、「Yだ。」という述部は、形容詞的で事柄の性質や状態を表す。名詞述語文は「XはY。」でも意味は通じるので、それに「だ」が付加されることで、ことさらに「確認」の意味合いが加わる。「XはYだ。」という名詞述語文が、動詞、形容詞文と異なるところは、この「確認」の意味が形になっている点と言える。

三枝の議論ではナ形容詞文について触れてはいないが、おそらく名詞文として扱っているのであろう。いずれにせよ、「だ」に「確認」という特別の意味を認め、丁寧体「です」の普通体という認識がないという点については、本稿に通じる議論である。

以下にそれぞれの品詞の普通体と丁寧体について整理し、表で示す。

	普通体	丁寧体
動詞	走る。	走ります。
イ形容詞	寒い／くある[注3]。	寒い　です／であります。
名詞	虹である。	虹　であります／です。
ナ形容詞	静かである。	静か　であります／です。

一語文

ここまでは、他の要素を持たずに発話されたいわゆる一語文だけで説明したので、尾上（1998）の一語文の分析をみる。ここでは特に一語文のみを扱おうとするのではないが、「だ」の使用と関係がありそうなので、以下に必要な部分だけをまとめる。

存在一語文
存在承認―喚体的A1（発見・驚嘆）/伝達的A2（存在告知）
モノの存在と遭遇した経験の直接的な表明　遭遇の際の急激な心的経験
内容承認一語文
―現場遭遇承認―確言系―受理的C1（受理）/確認的C2（確認・詠嘆）
存在そのことの発見でなく存在するものの内容の発見、承認
承認内容伝達
―内容告知D1（内容告知）

A1タイプは、偶然その場に聞き手である他者が居合わせたら、同じものがA2の存在の告知タイプになり得る。C1/C2タイプにはA1/A2タイプと同様のことが言える。これらはいずれも「だ」が接続できるものである。明らかに聞き手を想定して用いられるのはD1（内容告知）の場合のみである。少々強引ではあるが、「だ」が接続する一語文は、基本用法としては、聞き手としての他者の存在を想定しない発話形態（後節で、独話体として定義する）と認定して良いのではないだろうか。仮に「だ」を接続して対話に用いられても、そこに一切の丁寧さ・ポライトネスという、いわゆる聞き手としての他者目当ての機能は含んでいない。

「です」の語源

そもそも「です」は「であります/でございます」の短縮形だという説が一般的である。だとすれば、「である」の丁寧な形が「であります/でございます」ということになる。すると、やはりいったい「「だ」は何？」ということになる。

「です」の語源については、「で候」「でおはす」「でございます」「であります」など諸説ある。「です」は室町時代以降の語で、能・狂言では、大名・奏者・鬼・山伏などの名のり言葉で、近世では、男伊達（おとこだて）・遊女など限られた人物、特殊な場面に多く用いられる言葉であった。一般に丁寧語として使われ、諸活用形を用いるようになったのは江戸末期・明治期になってからである。

『デジタル大辞泉』より

「独話系」と「対話系」

発話には、聞き手である他者への情報伝達を最初から想定してされる場合と、聞き手である他者への情報伝達を意識せずになされる場合がある。例えば挨拶や会話といった言語行動は、聞き手である他者への情報伝達を必ず想定して発話する。

挨拶
「昨日は、ありがとうございました。」
会話
「これいくら？。」
情報提示
「明日もどうやら雪になりそうだね。」

一方、先述の尾上の一語文の分析でも出てきたが、何かの存在を発見した瞬間であったり、存在には気づいていたがそれが何かを確認できた瞬間の発話は、その現場に聞き手である他者がいても、ことさら伝達情報に対する反応を期待せず[注4]、以下のように発話される。

「UFOだ。」
　発見：何気なく見上げた空にそれらしきものを発見しての発話。
「鍵だ。」
　確認：例えば、カバンの中に自分が入れた覚えのないものが入っていることに気づき、手を入れてそれがなんであるかを確認できた時の発話。

本稿では、この２つの発話モードを「独話系[注5]発話」「対話系発話」とし、以下のように定義する。

独話系：聞き手である他者が発話の現場にいるいないに関わらず、話し手が聞き手から何らかの反応があることを期待せずに、一方的に情報伝達をしようとする発話の形[注6]。
対話系：聞き手である他者が発話の現場にいて、自身の発話に対して、話し手が聞き手

である他者から何らかの反応を期待しながら情報伝達するをしようとする発話の形。

話し手としての「私」の関与

名詞は、あくまで物、状況、事態に対する名前でしかないので、そのまま書いても文にはならない。

雪、机、愛、スマホ、ライン、実況中継、初動捜査

これらを文にする、言い換えれば話し手の意識を通して出た言葉にする場合、そのことを示す装置が必要である。それこそが「だ」の機能[注7]ではないか。名詞だけでは文にはならず、「だ」で私が表現者として関わっていることを示すのである。

ナ形容詞も同様で、それだけだと意味的にはイ形容詞相当なのだが、形的には名詞で、それだけでは話し手としての「私」が関わらない客観的に見た状況に付けられた名前と考えられる。

客観描写（私の関与なし）　静か、にぎやか、ほがらか、大変
主観描写（私の判断）　静かだ、にぎやかだ、ほがらかだ、大変だ

音韻的な機能

「船だ、船が見えたぞ。」
「飯だ、降りて来い。」
「火事だ。」

「「だ」は独話系発話という文を作る役割を担う」という議論を進めてきたが、明らかに聞き手としての他者に対する一方的な情報発信に登場する上記の例のような場合はどう扱えばよいのだろうか。試しにこれらの文から「だ」を抜いてみる。すると以下のようになる。

「船、船が見えたぞ。」
「飯、降りて来い。」
「火事。」

実際の発話としては少しイメージしにくいのではないだろうか。「だ」があることで、音的に安定する感じがする。他の例も以下に挙げて検証してみる。

判断	「だ」なし	判断	「だ」あり
○	「どろぼう。」	○	「どろぼうだ。」
△	「地震。」	○	「地震だ。」
△	「うそ。」	○	「うそだ。」
△	「警察。」	○	「警察だ。」
△	「休講。」	○	「休講だ。」
△	「事故。」	○	「事故だ。」
△	「津波。」	○	「津波だ。」
△	「海。」	○	「海だ。」

※表内の判断欄の、○は問題なく使用可、△は何らかの条件付きでの使用可を表している。

「どろぼう。」が唯一問題なく感じられるのは、泥棒を働いた人間に対して、その名前の代わりに呼ぶからである。これは、「Aから得た情報をAに対して発信する」場合であるとも言える。一方、それ以外はすべて「Aから得た情報をBに対して発信する」という構図になっている。たとえ聞き手である他者に対する発話であっても、他者からの反応等を期待しない発話は一方的で、やはり独話系発話と認定すべきである。また「だ」は母音アで終わることから、音声的にも非常に発音しやすい音である。これは無理なく独話系発話を成立させるために必要な要素であろう。「だ」の代わりに「よ」をつけても同じように一方的な発話である独話系発話を作ると言えるが、そこには女言葉といった、また特別な役割が与えられることになる[注8]。「だ」はあくまで独話系発話を成立させる無標の要素なのである。

上に挙げた例を対話系発話として用い、聞き手である他者からの反応を求める場合には違和感がなくなる[注9]。例えば、地震を感じたと思ったが、いまいち確信が持てず、そばにいる人に確認しようと「地震？」と最後が上がるトーンで伝えた場合などである。文字にするときには、「？」クエスチョンマークを一緒につけて書く事が多い。

私の結論（＝推論）

「だ」を独話系発話成立の要素と見なせば、そこに丁寧体の存在を認める必要はなくなる。あくまで一方的な発話なので、聞き手である他者に対する配慮が入り込む必要がないからである。逆に言えば、対話系発話には常に聞き手である他者への配慮が何らかの形で入っている必要があるのではないだろうか。つまり「です」は独話系発話の「だ」の丁寧体ではなく、「であります/でございます」を短縮した、少し格下げした対話系発話のベーシックな形と考えるのが、妥当だということである。

独話系発話：「だ」
対話系発話：「である」の丁寧体が、「です、であります、でございます」の３種

余談になるが、他者に読んで欲しい、そして何らかのコメントが欲しいという姿勢で論文を書く場合には「である」文を、一方的に発表してコメントなどいらないという姿勢で論文を書く場合には「だ」文を用いて使い分け、読み手もそれを理解していると面白いかも知れない。

注

1．本稿は、あくまで日本語教育をターゲットにして考察するので、形容動詞はナ形容詞、形容詞をイ形容詞と表記する。

2．何も付けないことは「φ」で示す。

3．「寒い」というのは話し手の感じる、感覚そのものを表現するときに用い、「寒くある」は、話し手の感じる感覚の対象を、コトとして表現するときに用いると考える。イ形容詞は、話し手があるモノ／コトを対象として感じたその感覚を表現するもので、１）話し手の感じた感覚そのものを表現する場合、２）感覚の対象となるモノ／コトを表現する場合との２つのケースが考えられる。

　１）私は（この部屋が）寒いです。

　２）この部屋は寒いです。

4．熱いものを触った時に「熱っ！」という場合のような、いわゆる反射でない限り、発話現場に自分以外誰もいなければ、頭の中では声がしても、実際には言葉が口から出ないかもしれない。反射意外に言葉が口から出る場合は、聞き手である他者への情報伝達の意識がどのようにあるかが問題となるのではと考えている。

5．独り言は、聞き手である他者が発話の現場にはいない、あるいはいても話し手が無視しているという、特別な場合と考えられる。

6．独話系発話、対話系発話という概念は池田（2011）にも出した。

7．本来「文」になり得ないものを文にするというのが「だ」の機能であって、断定・指定という意味は、それをある特定の文脈・コンテキストの中に入れた場合に、どう解釈するかというものに過ぎないと考える。例えば英語では、空から雪が降ってきたことを認識して発話する場合でも

　Snow.

　とはならず、

　It’s snowing.／It’snow.

　といった、文にして表現するが、これは、既に話し手として「私」が関与していることを表している。

8．「だよ」という形がさらに考えられるが、こうなると「よ」には他者に対する何らかの配慮といったニュアンスが感じられるので、ここでは扱わないでおく。

9．この場合はいずれも格助詞「を」の脱落。

参考文献

池田英喜（2006）「ダロウとヨ／ネ／ヨネの組み合わせ」新潟大学国際センター紀要　第2号
池田英喜（2011）「終助詞「ヨ・ネ・ナ・カ」の組み合わせ―出現頻度から考える―」新潟大学国際センター紀要　第７号
池田英喜（2012）「「が」の導入―初級日本語教科書の中に出現する「が」の扱い―」新潟大学国際センター紀要　第８号
池田英喜（2015）「「のだ／のです」と「よ／ね／か」―２種類のモダリティ形式の関わり方―」新潟大学国際センター紀要　第11号
大野仁美（2014）「「NPダ」をめぐって」『言語と文明』第12巻、麗澤大学大学院言語教育研究科編
尾上圭介（1998）　「一語文の用法　―“イマ・ココ”を離れない文の検討のために―」『東京大学国語研究室創設百周年記念　国語研究論集』汲古書院
三枝玲子（2001）「「だ」が使われるとき」一橋大学留学生センター紀要　4号
三上　章（1960）『象は鼻が長い』くろしお出版
『デジタル大辞泉』小学館　http://www.daijisen.jp/digital/index.html